

介護等体験実習 の報告

話を聞いて見守る

菅 華蓮

(国際言語・文化学科3年)

私が体験実習したのは、主に知的障害をもつ成人の方々が自立した日常生活、または社会生活を営むことができるように就労の機会を提供するとともに、生産活動その他の活動の機会を通じて必要な支援を行う「就労継続支援B型事業」という通所施設でした。

私は5日間の実習で相手の話を聞いて見守ることの大切さを学びました。障がいを持っている方と作業を一緒に行うことで相手の気持ちを理解しながらコミュニケーションをとる難しさを実感すると同時に、言葉選びや行動をひとつひとつ意識して考えることができました。

初日と5日間の実習修了後では、自分でも成長したと実感できるくらい、充実した体験をすることができました。日を重ねるごとに反省点が改善され、更により良くしようと思えることができ、得た知識を活かす努力ができました。作業中の声かけや挨拶、休憩時間での会話など、最初は緊張してなかなかできませんでしたが、利用者さんの名前を憶えて仲良くなり、職員の方から利用者さんの行動の意味を教えていただいたり、対応法を助言していただいたりして、3日目からは利用者さんから自然と声をかけられるようになったのがとても嬉しかったです。

まだまだ知識や経験が足りず、反省する点もありましたが、人と関わることが好きなので、相手の気持ちを考えたり、話を聞いたりする中で信頼関係を築いていく福祉施設のお仕事はとても魅力的だと感じました。声かけが難しいと最初に感じたのは、利用者さんの障がいや利用者さん個人のことをまだ知らなかったからで、話をして仲良くなることで自然と言葉が出てくるようになりました。

今回の実習では利用者さんたちからも職員の方々か

らも得るものが多く、考え方や視野を広げることができたと思います。大学の授業だけでは学べない、直接の関わりから得るものが多くありました。

たとえば作業中に不意に手を止めた利用者さんに、初日は『何があったの?』と驚くだけでしたが、実習後半では「〇〇さん、どうかしましたか?」と話しかけることで、作業続行を促すことができました。また作業中に突然奇声をあげた利用者さんに対し、職員の方が「どうしたの?」と対応し、イライラが抑えられなかったということを取り止めて、しばらくして落ち着きを取り戻す様子を見て、何かを強制するのではなく、行動の理由や気持ちをやさしく聞くことが何よりも大切だということを知りました。

今後生活していく中で、もし、障害を持つ方と会う機会があったら積極的に関わっていきたくと思いました。

長いようで短い5日間でしたが、利用者さんと共に作業したことや休憩時間での会話で得ることが多く、また、職員の方からの助言や励ましがあって、自分と向き合いながら成長できました。笑顔を忘れずに積極的に関わったり、いろいろ考えたりすることができ、とても充実した介護等体験実習でした。ありがとうございました。

【小川付記】「介護等体験実習日誌」では、担当職員の方から、笑顔と積極的な働きかけについて、お褒めのコメントがありました。

「日頃の観察」と「強い意志」

早崎 雄大

(史学・文化財学科3年)

特別支援学校で学んだ2日間で、非常に多くのことを学びました。私が実習をさせていただいた学校は、病弱や身体虚弱の生徒さんを受け入れている学校でした。小学校から高校生までが同じ校舎で授業を受けていました。私はその中で高校生の担当となりました。

2日間の実習で、生徒の表情や行動などの観察を日頃からよくしておくことの重要性を学びました。私が関わった生徒のうちの1人は、この表情の変化やしぐさ、声音などから、今どう思っているのか、何を考えているのかを読み取る必要があり、日頃と違う小さな

変化に気づくことが、結果として、その生徒の成長につながるということを実感しました。支援学校だけでなく他の学校でも生徒の観察は、その生徒の実態を知るための大切な条件になることに気づきました。教師として生徒とのコミュニケーションを上手に取っていくためには、生徒一人ひとりの日々の様子を知っておくことが必要であり、その変化そのものが生徒の成長であるということ学びました。

また2日目の活動中にいただいた「生徒の可能性を信じる」というアドバイスは、私の心に強く響きました。言葉だけでは簡単に思ってしまうのですが、実際にこれを続けるとなるととても難しいです。成長の度合いが目で見えてすぐにわかるような生徒ばかりであれば、その伸び幅を糧として教師も熱心な授業を行い続けることは容易だと思います。しかし成長の度合いがわかりづらい生徒や見ただけではわからない生徒の場合にはそうはいかないこともあると思います。教師側に生徒の可能性を信じる強い意志が必要です。この実習から、生徒は必ず成長していると信じて、小さな変化や少しの成長でも素直に喜べるように心の余裕を持つことや、日々の生活から生徒の観察をすることの重要性について学ぶことができました。

最後にいろいろなことを教えてくださった生徒の皆さん、担当の先生方に、この2日間の貴重な体験を与えてくださって、本当にありがとうございました。

【小川付記】「介護等体験実習日誌」では、担当教員の方から、「よく頑張っていたと思います。これから大学に戻っても是非この経験を活かして、これからの人生を開いて行って下さい」との、励ましのコメントがありました。

文学部教職課程

教授 小川 幸男

私は「介護等体験実習」とその事前指導である「介護等体験実習指導」を担当しています。

「介護等体験実習」は小・中学校の教職免許取得のための必修科目であり、それに伴い「介護等体験実習指導」も必修です。別府大学では、中学校免許取得を希望する学生が対象となります。

学生が体験実習する社会福祉施設と特別支援学校へは原則としてその最終日に巡回訪問して、学生の体験実習中の活動状況について担当スタッフまたは担当教員から聴き取ります。社会福祉施設への訪問は、私も含めて、教職課程所属教員4名で分担しています。また、評価のために全員の「介護等体験実習日誌」を査読します。

巡回訪問での現場からの聴き取りと学生が記載した「介護等体験実習日誌」から、担当者としての見解を簡単に報告します。

第一に、学生が「学んだこと」として多く記述していることは、コミュニケーションの大切さです。体験実習ではその対象が高齢者や障害者・障害児、まれに乳幼児であり、コミュニケーションそのものに、何らかのハンディキャップがあることがほとんどです。耳が遠い高齢者や同じ話を繰り返す認知症高齢者、言葉を発すること、あるいは理解することに何らかの難しさがある障害者や障害児です。それに加えて大半の学生にとってそのような対象者に接した経験がなく、最初に困るのはコミュニケーションをどうとるかという問題のようです。

体験実習中に対象施設や特別支援学校のスタッフ、教員の対応を観察して模倣したり、助言を受けて実践したりして、最終日までには、施設や学生によって差はありますが、対象者とのコミュニケーションのとり方が飛躍的に上達することが大半です。そのプロセスで、通じ合える喜びとともに、そのための観察や工夫、具体的実践の重要性に気づくようです。

「学んだこと」に多く記述される第二のことは「支援」についてです。対象者が何らかの不自由から困っているとき、全て手伝うのは「支援」ではない。対象者が努力してできることは、あえて見守ることも必要

だという趣旨です。それをスタッフから直接教わったり、観察から気づいたりしていくようです。中には対象者自身から「それは手伝わなでいい」と言われる学生もいました。上記2点を教育現場に共通するものとして、具体的に記述する学生が多くいます。

逆に「いくら言っても声が小さい」や「指示したことしかせず、自発的な質問や積極的な利用者への働きかけが全くない」というスタッフからの評価もまれにありません。教員としての資質に問題があることが推測できます。教職課程教員間では情報共有して、注意深く、観察、指導していきます。

認知症患者がほとんどの高齢者入所施設で、何回も執拗に繰り返す同じ話を、いつもニコニコして楽しそうに聴いているので「うちの施設のスタッフに欲しい」と施設長から言われたこともあります。その学生は大学の授業では消極的で目立たず、成績も苦しいので、「教師としてはどうかな？」と認識していましたが、人には適性があるものだと気づかされました。結果として教職課程を辞退し、民間企業に就職したようですが、その後の彼の人生に光を感じました。

老人ホームで体験実習した男子学生について担当スタッフの方は、「将来、自分の子どもの担任の先生になって欲しいと思いました」と私に言いました。豊かな人間性や洗練されたコミュニケーション、慎重かつ積極的な利用者さんへの対応という活動状況の報告の後にそう言ったのです。彼はその後、公立学校教員に採用されました。活躍が期待されます。

4年次の「教育実習」に先立って実施される「介護等体験実習」は、教員になるために「現場で実践しながら学ぶ」ということと、基本的コミュニケーション技能の訓練の場になっています。4年次の「教育実習」では、まさしく教員としての技能そのもの（授業や指導案づくり、生徒との接し方など）の実践学習の場ですが、社会人としての節度を持ちながら、指示を仰ぎつつ、自分で工夫して実践していくことは、教師以前の人間力の育成になります。そのためにも、その結果としてもコミュニケーション能力を高める機能を持っていると考えています。

